第1回日中米有機金属化学セミナー (1980年6月, 北京において) 報告

石 井 義 郎*

The First Seminar on Organometallic Chemistry of Japan, People's of
Republic of China and United States of America.

Yoshio ISHII*

一昨年4月来日中であった筒井稔教授(米テキサスAM大学)と相談し, 日米双方の研究者が中国をたずね, 北京において日中米三国セミナーを開催してみたいという提案書をつくり, 中国大使館をおたずねして張宇傑書記官に本国政府への伝達方をお願いした。その折には最近の重要な研究テーマである「均一系触媒反応」に関するセミナーを申し出た。そのころは中国内にどのような研究者がいられるか予備知識は皆無に近い状態であった。その秋到北京の化学研究所に江英彦氏(阪大工出身, 大河原六郎先生の弟子)がいられることを知り, 文通を開始した。江氏のご返事ではテーマを変更し「有機金属化学」としてほしいこと, 中国科学院では中国内における3ヶ国の共同セミナーは最初のケースであり, 国の上層部に申し出て慎重に検討しているのでしばらく待つてほしいとのご連絡をいただいた。中国科学院がわれわれ

の提案(1980年, 北京にて開催)を承諾し, 予備打合わせのための訪問の許可が到着したのは昨年2月末のことであった。

そこで米国の筒井教授ご夫妻と同行し, 4月12日から10日間中国を訪れた。三国セミナーについての相談は北京の化学研究所の胡 亜東, 江 英彦教授と上海有機化学研究所から来られた黄 耀曾, 徐 維鏢, 戴 立信教授とわれわれの間で進められた。その結論は黄教授が主となり, 6月10日~13日の間, 北京友誼賓館内科学ホールにおいて開催, 口頭発表は中国6件, 日米各10件とし, 中国側の発表を主とするポスターセッションを設けること, アブストラクツ作成, 後日 Proceedings を出版することや Ladies Program は中国側で用意することなど, これらの内容を取りまとめてタイプした正式提案書に, 黄, 筒井, 石井の三国代表者が署名した。

写真 1

石井は帰国後, 北京で中国の方々に選んでいただいた研究者の方々にアンケートを送り, 私費によるセミナー参加をお誘いした。幸わいにして先約のある方を除いて多くの方々が積極的に参加して下さることになった。米

* 中部工業大学工業化学科 ()

* Chubu Institute of Technology ()

写真 2

国では希望者が多く、筒井教授は困惑されたようであった。昨年9月フランス Dijon における第9回国際有機金属化学会議の折にも、北京で会いましょうと仰る米国の学者によくお会いしたり、伝え聞いてノルウエーのオスロ大学 A. Haaland 教授もぜひ参加したいと希望されたので、日本側の一行と旅程をとにもすることとした。

Dijon にて米国科学財団はこの1980年北京セミナーを1974年ハワイで開催した日米有機金属化学セミナーにつづく会議として重要視している旨知らされた。帰国後学術振興会に赴き米国側の希望を伝えたが、日米セミナーの一つとして認めることに難色を示され、9月末ワシントンで開かれた NSF・学振の会談の結果も不調で、NSF の強い熱意は実現できなかった。

この北京セミナーは中国科学院主催で、後援団体として、中国化学会、米国化学会および有機合成化学協会の三学会となった。当協会がこの北京セミナーを後援して下さることを理事会でご承諾いただいたことに感謝している。

さて日本側発表者のアブストラクトはことし3月に北京に送付した。日本側は大部分の方が6月9日(月)大阪または成田発で北京到着、8日間友誼賓館に滞在し、17日に杭州に飛び2泊後、汽車で上海に入り、3泊後22日(日)上海発で大阪、成田に帰国することとなった。日本側は15名に7名のご夫人方および上記 Haaland 教授が参加者であった。敬称略でお名前をあげる。鈴木 章(北大工)、桜井英樹(東北大理)、井上祥平(東大工)、辻 二郎、山本明夫(東工大)、織方郁映(化技研)、山崎博史(理研)、伊藤健児(豊橋技科大)、熊田 誠、三枝武夫(京大工)、中村 晃(阪大理)、黒沢英夫(阪大工)、萩原信衛(阪大産研)、副団長として大河原六郎(岡山理大)と石井である。米国側は筒井 稔, R. F.

Heck (Delaware 大) が正副団長で、ほかに A. Aguilo (Celanese 社), R. Angelici, R. Larock (Iowa 州大), D. Bergbreiter (Texas A & M 大), A. Chalk (Givaudan 社), J. Eisch (New York 大, Binghamton), D. Forster (Monsanto 社), R. Grubbs (California 工大), R. Pettit (Texas 大, Austin), M. Rausch (Massachusetts 大), C. Schaeffer (Elizabethtown College), D. Slocum (Gulf 社), C. Tolman (du Pont 社), R. West (Wisconsin 大), D. Weyenberg (Dow Corning 社), J. Williams (Eastman Kodak 社), A. Wojcicki (Ohio 州大) の19名と11名の同伴者(お子様方をふくむ)の方々および西独 Beilstein 研究所の R. Luckenbach の一行であった。

中国側は61名の正式参加者のほかに会議、宿泊、案内その他の裏方の仕事に数十名の方々がかきわめて熱心に誠意をこめて働いて下さった。

われわれの到着した9日夜にミキサーがあり、三国の人たちのはじめての会合である。翌10日朝から会議がはじまった。議長の黄教授の開会と歓迎のご挨拶があり、筒井教授が三国の小国旗を壇上にかざり軽妙な挨拶をされ、石井の言葉がつづいた。午前の子の残りの時間は3国から1名づつ、熊田, Heck, 盧教授の講演があり、大河原教授が司会された。そのあと会場の科学館ホールの入口で記念撮影があった(写真1)。最前列左から胡, 盧, 大河原, 石井, 李蘇教授(後述), 筒井, Heck, 黄, 熊田と並んでいる。

日, 米の学者は有名な人たちであり、研究内容もご存知の方が多いと思われるので、ここには中国の講演者と題目をかかげておくこととする。

盧 嘉錫 (J. X. Lu): Mixed transition-metal cu-

bane-like clusters — some structural considerations in attempted synthesis of new important clusters. (福建物質構造研究所所長), 蔡 啓瑞 (Cai Qirui): Coordination catalysis by transition-metal complexes — nitrogenase catalysis and its chemical modeling. (厦門大), 黄 耀曾 (Huang Yaozeng): Studies on the application of arsenic ylides in organic syntheses. (上海有機化学研究所), 顧 以坦 (Gu Yijian): The studies on the new reactions of pyridine copper chloride complex and lateral metalation and alkylation of alkylpyridines. (大連化学物理研究所), 江 英彦 (Jiang Yingyan): New polymer-supported metal catalysts for hydrogenation, hydrosilylation and conversion. (化学研究所, 北京), 王 积濤 (Wang Jitao): Studies on bis (cyclopentadienyl) bis (aryl) titanium, zirconium and hafnium compounds. (南開大, 天津), 顧 婉貞 (Gu Wanzhen): The role of transition metal complexes in the photoreduction of water to hydrogen. (大連化学物理研究所).

第1日夕刻には人民大会堂3階でレセプションがあり、中国化学会副会長であり、中国科学院の重要メンバーである李 蘇 (Li Su) 教授の招宴があった。翌11日午後は excursion で故宫博物院をゆっくりと見学した。夕食後4つのグループ [均一系触媒反応 a) 反応と機構, b) 工業的応用。有機金属化学の最近の話題 a) 遷移金属, b) 典型元素] にわかれ、2時間余にわたって各群とも活潑な討論が行われた。中国の人たちも会議に次第に慣れてきたようである。12日午後は科学ホール内の広い一室で35件のポスターによる発表があった。大部分が中国側の発表で、さすが文字の国だけあって、英字によるポスターの作成も下手な字がない。中国側の口頭発表もこれらポスター発表も、昨春訪中のさい伺った内容よりもさらに大きく研究が進行していたこと、中国の学問の回復力の強さに敬服させられた。同日夜は日米双方で黄、胡、江教授方を北京ダック店にご招待、われわれも大満足であった。最終日(13日)は開会へき頭、黄教授が日本の大平首相の逝去の報を告げ、全員起立して黙禱する。午後4時半からは閉会式、筒井、石井、黄の順で挨拶、4日間のセミナーをかえりみて、中国の人たちが積極的に発言し、日米双方の科学者にとっても中国に知人を得たこと、日米間の親密さがさらに深まったことなど収穫の多い会合であった。中国の科学者が近い将来、国際会議において発表し、力量をつけてゆくもの

と期待される。同日夜は国際クラブで、中国科学院副院長の錢 三強 (Qion Sangiang) 教授、李 蘇教授も出席され、さよならパーティーとなる。いく人かのスピーチのあと、盧教授の作られた漢詩の紹介、日本の若いご夫人方のコーラスや、中国科学院の通訳の方の日本語による「北国の春」の歌もとび出し、なごやかな気分のうちに、お互いに別れを惜んだ一夕であった。

翌14日(土)は午前中、化学研究所の見学、柳 大綱所長がご病気で休まれ、かわって錢 三元副所長が説明された。午後2時には全員人民大会堂に招かれ、万里 (Wan Li) 副総理と会見した。その折の概略は中国のテレビで放映されたとのこと。記念撮影は万里氏を中心に右に筒井、錢 三強、左に石井、李 蘇と並んだ。あと(写真2)に示すように中央正面に右から、万里氏、筒井、石井とならび、左右に全員着席して、主として副総理のお話を伺う。中国のもっとも重要な新聞である人民日報の6月14日号には中、日、米金属有機化学学術討論会閉幕の記事があり、16日号には万里会見中日米等国科学者の記事が掲載されていた。

日米のご夫人方はわれわれの会議中、Ladies Programにしたがい、北京について多くの知見を得られたようである。15日(日)は日米全員、万里の長城、明の十三陵のうち定陵を見物、16日(月)は北京大学訪問と燕山石油化学公司の見学にわかれた。17日(火)には杭州に中国民航で飛んだが、それ以前北京では夜、音楽会、バレエ(奔月という神話舞劇)に招待された。杭州では西湖々畔の杭州ホテルに2泊、小雨に煙る西湖の東洋的な美しさに感嘆、19日には汽車で3時間かかって上海到着、20日上海有機化学研究所見学、汪 猷 (Wang Yu) 所長のご紹介と数人の研究発表を伺った。20日夜汪所長のご招宴にあずかる。中国最後の夜は、われわれがお世話になった上海の黄、戴教授と徐女史に感謝の意をこめて広東料理の店にご招待、そのあと北京オペラ(上海越劇院による追魚)を見せていただく。

翌22日(日)午後日航機にて上海発、2時間後大阪に帰る。このようにして「歴史的」な日中米セミナーを終了した。近い将来第2回三国セミナーが開かれることを期待している。(昭和55年8月14日受理)

[追記]

本文執筆後、9月12日の第5期全国中国人民政治協商会議全国委員会において、新たに趙 紫陽氏が総理になられ、それにつぐ筆頭副総理に万里氏が就任された由、朝日新聞の記事が出た。私どもは同氏の今後の活躍に期待したい気持でいる。